

*Panel Discussion*

**CARDIOMYOPATHY: NON-INVASIVE APPROACH FOR THE  
DIAGNOSIS, EVALUATION OF PROGNOSIS AND TREATMENT**

1. Secondary atypical hypertrophy: Hypertrophic cardiomyopathy with acquired risk factors
2. Mechanism of the systolic anterior motion of the mitral valve and site of the intraventricular pressure gradient in hypertrophic obstructive cardiomyopathy
3. Non-invasive diagnosis of the hypertrophic portion in cardiomyopathy: Comparison of electrocardiographic and vectorcardiographic abnormalities with the hypertrophic portion of the left ventricle determined by two-dimensional echocardiography
4. Differential diagnosis of idiopathic congestive cardiomyopathy and ischemic heart disease by echocardiography and  $^{201}\text{Tl}$ -myocardial scintigraphy
5. Reliability and limitation of various diagnostic methods including nuclear medicine in myocardial disease
6. Pathophysiology of hypertrophic and congestive cardiomyopathies: A guide of fundamental therapeutic approach
7. DISCUSSION

*Moderator:*

Ryozo OKADA, M. D.

## 司会者のことば

最近、非観血的心機能検査法が進歩して、種々の心疾患が比較的簡単に診断可能となりました。その中でも心エコー図、とくに超音波断層法や核医学的心臓イメージ法により心臓の内部の形や動きを具体的にキャッチできることから、従来の心電図や心機能図から頭の中で病態を考えて、再構成する知的操作が不必要になり、みればわかる式の容易な診断に傾く弊害もあるようにみうけられます。

一方、疾病の考え方の側でも、特発性心筋症——最近では特発性をとって単に心筋症と呼ぶようになりましたが——という本来ならば病因上除外診断として、最後に残って原因不明としてしまうことに羞恥を感じながら、そっと診断すべきものに対して、それを積極的に診断してむしろ得意になっている妙な傾向があります。たとえば本来、心筋の異常事態に対する反応の一表現型であるべき肥大が疾患単位であるかのように誤解されて、非対称性肥大が発見されれば、高血圧が合併していようと、心筋炎が先行していようと、それを肥大型心筋症だとしてしまう無思慮な診断が、検査をすればそれが具体的映像として捉えられるという、まさにそれだけの理由でなされているわけであります。

確かに臨床診断法が観血的方法から非観血的方法に切り替えられていくことは、望ましいことで

あり、医学の進歩の正道であることは間違いありません。しかし、一面、その診断精度やデータの解釈に十分注意を払わないと、大きな誤解のもとになることもあるわけです。

そこで、今回は心筋症という現在問題の多い心疾患を対象として、通常および最新の非観血的診断法を適応することにより、診断・治療の効果判定上どれだけ効果が上がるかを、各方面の第一線で活躍中のパネリストを選んで討論してみたいと存じます。今回、演題を公募いたしました。多種にわたる検査法のすべてを網羅するわけにもいきませんし、一つの領域内から多く応募いただいたテーマについては、まことに残念ながら割愛させていただいた演題がございます。この紙面をかりて、今回ご辞退いただいた諸先生には深くお詫びいたします。

心筋症はうっ血型・肥大型に2大別され、そのおのおのは特徴ある病態を示すとされています。その移行型や経過中の型の変化はないものか、その他の型も考慮の必要があるか、また診断上一次性と二次性、特発性と特定心筋疾患という区別を行う上の注意点にまず触れていただき、経過観察や治療効果判定に役立つ指標について各演者の主張を拝聴したのちに、自由に討論していただきたいと存じます。